

■ ICU と医学的リハビリテーションの関わり—理学療法を中心に—(西郊靖子, 他論文)

急性期および救急患者の治療を, 集約的に高度医療を集合させて行う医療単位が ICU である. ICU の各施設ないし病院での役割と特殊性を説明した. それを踏まえて, ICU におけるリハビリテーションの関わりと, 実際に行われている理学療法について述べた. 医療の進歩にあわせ ICU の専門化が進む昨今は, リハビリテーションの対応も幅広い理解を必要とする一方で, 基本的な手技の確実さが必要とされている.

■ ICU における重症熱傷患者の理学療法(亘理克治, 他論文)

急性期における広範囲重症熱傷患者に対する理学療法は未だ確立されているとは言い難い側面が認められる. そこで熱傷ショック脱出後からの理学療法全般について, 呼吸理学療法の実践と効果, 良肢位保持, 関節可動域の改善, 早期離床などについて具体的に述べた.

すべての理学療法士にとって身近なテーマになりにくいと思われるが, 熱傷という全身的な炎症反応の病態, 合併症を理解することによって, 他の疾患における理学療法を施行するうえでも有益な情報が得られると思われる. また今後は, この領域における理学療法士の積極的な介入が待望されている.

■ ICU における頸髄損傷患者の理学療法(濱田哲郎, 他論文)

ICU における頸髄損傷患者は安静固定期にあり, 高位損傷の場合は人工呼吸管理されている. その状況のなかで, 早期よりアプローチする理学療法は重要な役割を担っている. 具体的な訓練内容は, 損傷部位を保護したうえでの関節可動域の維持・改善, 筋力の維持・増強, 呼吸理学療法であり, これらが的確かつ効果的に行われることが早期回復, 早期退院への第一歩となる.

■ ICU における小児心臓手術後の呼吸理学療法(稲員恵美論文)

小児心臓手術後の呼吸障害は出生直後より起こる循環動態の異常と呼吸障害により, 小児であるがゆえの多様な症状が現れる. これに対してルーチンに行う効果的な呼吸理学療法に関する報告は少ない. 医療が刻々と変化するなかで手術の適応年齢, 体重などが低くなる傾向にある. このため, 呼吸理学療法の手技も従来の方法では対応できないことが多い. バイブレーションやパーカッションは即効性に乏しく, またスクウィーミングは即効性という点で効果的であるが, 施行中に経皮的酸素飽和度が低下したり, 聴診上明らかに呼吸音が減弱し, 呼吸が延長することを我々は経験している. これらの経験と小児心臓手術後の呼吸器系の問題点等を考慮した独自の方法を考案し, 臨床に用いて効果を得ている. 先天性心疾患をもつ小児の呼吸器系の問題点を明らかにし, 呼吸理学療法を行うために必要な評価と姿勢管理を含む呼吸理学療法の実践を紹介したい.

■ NICU における簡易シーティングシステムの開発(田代千恵美, 他論文)

NICU において, 早期に障害児の変形を予防し, かつ介護量の軽減を目的として, 携帯が可能で汎用性に富む簡易型シーティングシステムの開発を試みた. 材料は外装部を布団圧縮袋, 袋のなかに挿入して固定するものとして内部が空洞の 5 mm×7 mm のプラスチックパイプを使用した. 袋内の空気を吸引することにより, 袋全体が硬くなり, 必要とする座位やその他の姿勢作りが可能となった. 本機器は簡易に作製でき, 瞬時に修正が可能である.